YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

II.49

PLEASE RETAIN
ORIGINAL ORDER

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

情報　第二号　一頁　（ホープ十四哩建設委員会　高務部編輯）　一九四二、八、一九

むかし湖底のあとかとも思はれる山間の緑高地、二の木斜！プ十四哩農園（ZASHIN）の日本人町建設事業は材不足に悩みながらも漸次進捗のようを早め住宅アパート建築に、製材所運搬に、水源池水道敷設等に、夫々馬力をかけてゐる。ハストア家屋の完工も既に下工事に取掛つたので第二回帰ヶ人村の日まであでには是非とも、原店の運びに至らしめたい。而も町の商店はセキュリテー委員会で経営するもので、共して入村者から資本金を出させて運営するものではなく、現在我々は未だ夜間ランプを使用してゐる。電気には入れば無料で家外早く町に電燈が燈ることになるら、電力工事に先立って目下ムも本日（八月十八日）町への電話線が敷設工事が開始された。ホープ町への電話開通によって、従来の不便は少なからず解消される。最近入村者殖続として到来したゝめ食堂の設備は増設又は設備で最近筆者に絶する位であつたが食堂は増設又は設備で最近混雑は緩和された。在住者二百六十名の約八割方を一時に収容出来るやうになつた。（食事もたんくと改善されつゝある。

さて我等の町建設進行の実状を記すことにしやう。

（一）住宅＝今日迄に完成したもの三十棟（六十家族収容可能）は昨年七月末に一応完成家族をキュリテー委員会無料提供の『ハッピ』ストーブを次々にすえてゐる、今週中には約五十棟住宅出来あがる見込、水道さへ敷設する此は、いつでも家族迎ひ来者して、こゝを一時的宿住の天地と為し得る、家族十六戸、二十人位住める、小家族は二組大家族は一組、平均十八人位住める、都市計劃のプランは別稿略図参照。

（二）アパート＝大建物の二階全部三十室（三十家族収容）が大体出来上つた。ストーブ（十一基）基礎を二家族で使用（ガラ）迎へ入れ婦女子の来者を待つてゐる。目下階下二十室の改修工事進行中。

（三）共同洗濯場＝既に設備は整ひ在住婦人達はこれを使用してゐるがあと屋根を葺くだけで全く竣工。

（四）共同風呂と便所＝男女別々として二週間前完成。

（五）売店＝之則迄の如く本日から工事開始、倉庫用には鉄筋建物なり内部改修式＝必要必要ストックが持ち込まれる。

（六）学校と運動場＝これはバアーン（ロにバアーンとなつてもBCサオ一）と云はれる本格的建物でその全面積は既市日本人ホールの約三倍の二階全部を教室に仕切り、階下を雨天運動場に使用するのだがまだ工事に着手してゐない。目下二階は在住男子の臨時宿所になつており、他の施設の完成と相俟つて学校工事は始められる

（七）医療＝本週中には日本人医師が来着の筈。現在はフォースト・エッドで間に合はしてゐる。

（八）水源池＝現在でも在留者のために充分な設備はあるが都市計劃に伴ひ、大ダム工築の必要にせまられ工事進行中、その大ダム完備までには約二週間を要すると思はれる。高度三百呎の水源池が出来れば六吋パイプを以て町へ水を引くのであるから住宅区域全面に亘る水圧は充分となられる。昨今就仕隊は真剣になつて住宅区域への水道穴堀りをやつてゐる。

（九）製材所＝八月十七日から本格的運転を開始した、目下十数名就仕中。

（十）薪＝婦人に切＝出し中で質の良好なのは材料の豊富なのと共に自慢の一つ。

（十一）消防＝二組十七名でA、Bの二組は編成済みで更に順次編成が増加される

（十二）農園＝既に新鮮な野菜が食卓に上つてゐる。これは最初に来た人の努力によるもので、尚ほ農園は強制就仕によるものではない。

『タシミ』町名の由来

我等のホープ十四哩ランチ日本人町は最近タシミ（ZASHIN）と命名されたが、その由来は現在オタワ政府の任命により日本人移動に当つてゐるビーシー、セキュリテー委員会の委員長テーラー、委員シーラス、及び同ミード三氏の頭文字を二度宛取つて綴つたものであるとされてゐる、即ち

TAylor
SHirras
MEade
の
TA
SH
ME
を取って
TASHME
と命名

既市英字紙のうちには『ホープ十四哩』を盛して早くも『タシミ』名を使用してゐるのもある、尚ほこの『タシミ』を日本語にあてはめると『多志美』『多慈美』『多子賓』等と色々あるが既市知人間では『多志美』を盛人に使用しはじめてゐる。

郵便宛名は当分左の通りにした方が安全である

TASHME, HOPE, B.C.

タシミの同胞人口

タシミに初めて日本人が乗り込んで来たのは本年七月九日で其の数は十八名であつた。之が次々の到着によつて八月四日は二百九十名に達し、その後出入の異動が多り現在この所の日本人総人口は二百六十七名となつてゐる。やがて婦女子来住の暁には日本人々口は三千乃至四千に至るべく、其は町の拡張によつては、もつと包有する日が来るかも知れぬ。

出村者氏名

宮西豊蔵　永田治徳　奥野武喜　同所能吉　赤田定次郎　佐伯又治　堀崎実次　房吉

森村清一　戎尾徳二郎　上牛良太郎　北川久吉　外次郎　堂前信夫　谷井吉次　曾我勉弥　汚谷兼次郎　技村留吉郎　有馬義親　高島畏三　當山徳蔵　當山正松

高橋吉見　高林吉永　君林喜義　近藤傳作　尾前精二　尾前政治　尾前信夫　竹内春吉　光王静　大橋彦三郎　河村信一　吉田藤造　松山徳次郎　清野

柴田光太郎　継波経幸　稲葉熊吉　大橋彦三郎　吉田春吉　三井田信太郎　小宮山高彦　清野時次　山元雄吉　山本武喜　横崎亀一　山根豊三　佐伯時吉　高橋時吉　磯崎拾松　西村義則　山元三　吉田藤造　鈴木甚吉　味元虎巣　赤田定次郎　岩本茂次郎　飯沼忠三郎　奥野又治　有馬興三　五領

出村者氏名

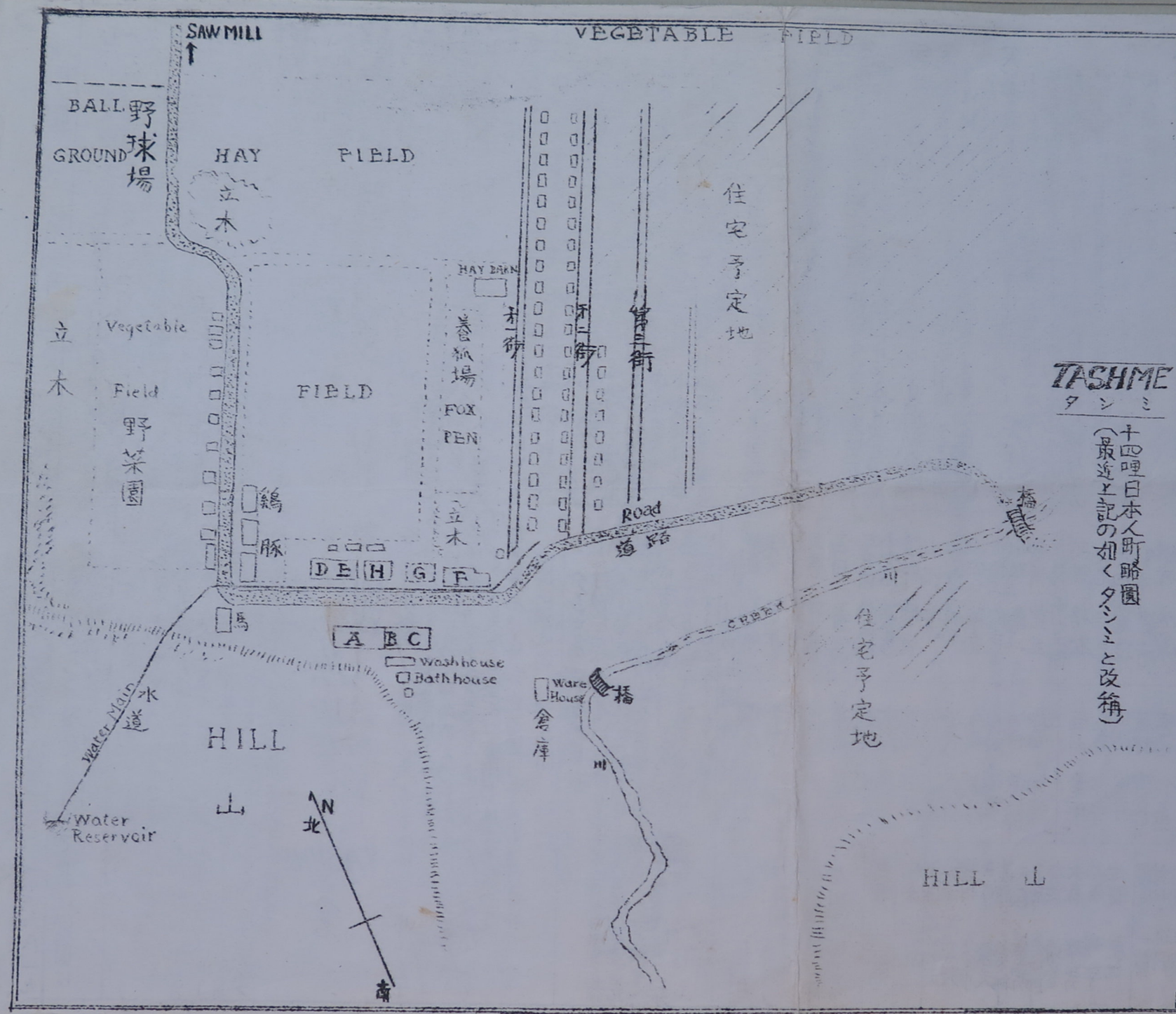
岡所実次　田中廣　藤野富造　高木傳記　高島義親　飯沼忠彦　富小徳義　富山正松　阪口初太郎　曽我勉弥　永原源徳　奥村兼次郎　河合治徳　永田　西山幸平　佐藤熊吉　堀田俊男　若林源太郎　宮田仁之助　堀崎房吉　江島栄吉　若林藤作　鈴木辰義　及川誠

佐藤玉喜　及川直人　宇野哲人　山本藤太郎　及川勇男　古賀　孫助　田中　虎一　飯田英夫　飯田正夫　米市　飯田繁夫　渡部松太郎　大森寅男　手島佐四郎　有馬清義　大森奉男　梅津場平　佐賀重治　岡内G一郎　松村三郎　西畑重太郎　田上光雄　田上宣次郎　中津好四　鈴木

（裏面へ）

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15



TASHME タシミ

十四哩日本人町略圖
（最近上記の如くタシミと改稱）

俳句　到着順

残暑挨……無名氏
△残暑に建ち並びゆく家の縁
△残暑や杉の葉軽き月を呼ん
△秋暑し麗夏つよき夕餉とる
△ツラウト釣るや系の編尽徐しめり
△戰況ニヤス秋灯に人輝黙しつゝる

無題……芋太
△陽を寄せて金地の上畳変暑すゝる
△扶はめく残暑を衝いて合宿手組を
△建設の面白き哉秋の晴れ
△新涼や西瓜編れて行く夜の破蕉戸
△蚊口三十新涼を喰ぎつゝる
△秋涼し俄鰻夫寄かゞもの洗ふ
△新涼を月日の木の香にひたりけり

無題……白砂
△建設夫早干り火上類こけて
△蕎月我が村遠く太陽花く
常務員の帰村
△麦村へ生る希みの服を脱ぐ

無題……紫月
△新らしき希望はもゆる本ーブかな
△山峡に朝日かゞやく理想郷
△朝りかに ひゞく谷間やつちの音

短歌「芋太」

△夕日かげさゝやくなかき青草の
原にこもりて鳴く蛙あり
△陽光に燿き映ゆる朝露野草の
食む馬は湯気あげており
△庭の夏草露にぬれ音かゞ者に
思ひきびし戰ふ兄を身近に感ず

入村者氏名　一頁より つゞく

北川　一雄
北川　傳一郎
瀧本　七郎

西川　清太郎
信田　彰三
福本　正一
福本　義郎

役記　清報第二号は瀬
△我々一同暑さに
負けず奮闘し
てみる
△各地散在中の
知人各位の
御健康を祈る

A は目下就働者の宿所であるが有れ改修されてアパートヌは三月少年合宿所となる

B C 小家族用のアパートで四十二家族收容可能

D 学校及びホール

E （階下）雨天運動場

F G 大食堂 ストア

H 倉庫

住宅地 家と街は適宜に区分されてだんだんと発展されて行く

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

ツラウトめ

午后

僕は とう言う因縁かよく人里はなれた山住をする、自分が好んでした訳ではないが、一生の中によくこんな強験を自分はつまされた

お寺もなく社交もない山の中でも面白い所もあるもので、友人をそそのかしてツラウトめを食べに出掛けた

子を思い出して他の所へ行くえんでいる、昔あつた東京かなにお米を入れて、ゴをい種に等間油を入れ

(五一ページ参照)

物子を一杯場ポケットに取り込み釣道具一式と言つても五、六味のテグスにフライフックを付け三本指にクルクと巻いて、ハリの鉢巻に

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

差し込む、たゞ、それ丈けの仕度
位である。そして、山の中の森林の繁
茂みにチョロ／＼流れて居る小川へ
行つて流れの所々に出来て居る
水溜りに餌をさがして居る、五六寸位
の[illegible]ツラウトを釣るので
ある。誰も行かない森林の中で
ポプラやオールダーの繁つた葉
蔭に夏の太陽を避けて、森
の香を満喫し乍ら、三、四呎の
手頃の木の枝を切つて釣竿を作
り、其先に糸を括り付けて、流れ
の水面に、恰も蝶々が水に落ちた
見たいにフライフックをおどらせて
居ると、ツラウトが飛
び付いて来る奴を引掛け釣をはずして

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

又投げる又投げつく、こんな
にして三十匹釣り上げたの
頭はその場に
捨て置く。
仲間の中のつりきんが、南京
釜の米をクリーキの水で洗って
水が濁るまで米を
三吹位に三度
切って長さを揃へ、クリーキ
端に水に浸はれて居る、シーダー
や柳の根を切って来て一端
を縛り也河に浸りミツド形に
立て、釜をつるし、枯木を集め
て火を焚く、釜の飯が泡を吹
く頃合に大火を焚き釣つたツウ
トをこの飯の上に並べて蓋をし
トロ火で蒸す。
いよいよこの飯が出来、ツウト
も煮えたのを奥の頭を二ツ指
で交へ肉を濾し骨を頭を捨てる

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS
FOLDER NO.
3-15

が
を（
の
い
ゝ
ゝ
た
ー
ゝ
し
た
ー
儀
式
が
行
は
れ
た
。
墓
の
外
に
棺
が
出
て
来
る
間
の
儀
式
が
ず
ゝ
と
本
から
不
ゝ
約
束
して
居
た
と
同
じ
事
が
行
は
れ
た
。
「
彼
ら
の
間
に
三
人
・
業
が
一
番
と
言
ふ
ー
」
と
言
ふ
ことが
あつた。

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

の上にかけ。これもキヨトンとしてSを見てたたかと祝線が合つた。その瞬間の叫び声であつたー

Sは喫驚して釣をはね揚げた拍子に自分の左のパンツに引掛けた。「熱だく」と叫び、陸に上り、命其釣をパンツから外そうとして焦燥する。下流にたたAは、釣道具は、どこへやら投げ捨てゝ右足をポケツトからマツチを出し、芝生とる時のやうに揚げて、ドンゴリパンツでマツチをすり、其マツチの小さい火を目八分に捧げ、其火が消えもしないやうに陽の方へ向け、横元をいやうに陽の方にSの方へ向け、マツチが燃えつくす迄又ポケツトから出した右脚を掌げてパンツをすつて目八分に掃げて除りする「熱はどこだ」

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

「Yの方へ行きよった」「大きかったか」
「カイ奴ら赤い口を開てクサッタ」
僕は代様子を木の間を通して
見て居た。Sが瞬を殺かして、弗
狙撃して撃ける白を殺こうとし
て隠れて居た子はナルホドと頷ける
だが林間貧尚暗いあども言へない
夏の日中にてツチの火を囲八分に
掃けて除ける行事は一体何
の為めか
「ユーラ知らん顔」笑ふ心ってる野獣
は火を恐れる生ーを オドと火を
とぼしてやられたんじゃ」
Aの説明は至極割切っておる
「ユーラもよく覚えておれ」と教へてくれた。